

平成 21 年 6 月 3 日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)

研究期間：2007 年度～2008 年度

課題番号：19830107

研究課題名(和文) 高齢者福祉施設における回想法導入による効果の確認

研究課題名(英文) The Effect that Practiced Life Review in Elderly Nursing Home

研究代表者

津田 理恵子(TSUDA RIEKO)

神戸女子大学・健康福祉学部・講師

研究者番号：80441202

研究成果の概要：2008年2月～2009年7月の期間に、特別養護老人ホームで、入所者13名を3グループに分けて、昔の懐かしい話を中心として、味・品物・動作などを活用した回想法を合計15回行った。その結果、入所者の生きがい感が一時的に改善することが確認できた。さらに、回想法に参加した介護職員の、介護負担感も軽減した。このことから、特別養護老人ホームにおいて、回想法を導入することで、高齢者・介護職員双方に良い効果が期待できることが明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	660,000	0	660,000
2008 年度	680,000	204,000	884,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,340,000	204,000	1,544,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：社会福祉関係・回想法・生きがい・施設入所高齢者・介護負担感

1. 研究開始当初の背景

(1)回想法の起源

回想法は、アメリカの精神科医 Butler(1963)によって提唱された理論で、高齢者の回想に対し、共感的・受容的態度で意図的に介入することで、老年期の最終課題である人生の統合が達成できる可能性が開かれると提唱した。

Butler が、高齢期の最終課題を導く実践的な概念として回想法を位置づけて以降、高齢者の過去への回想は積極的に行うことが望ましいという考えに転換され、回想法を活用した実践的研究や、回想法の基礎的研究が、北米やイギリスを中心として数多く行われ、その理論は広がりをもっていた。

(2)我が国における回想法研究の実状

わが国では、野村(1992)が特別養護老人ホ

ームで、回想法を実践し、その報告から回想法研究はスタートした。その後、保健・医療・福祉など幅広い分野で回想法は活用されている。

先行研究においては、回想法実践中の評価として、逐語録をもとにした質的な内容分析の報告が多くあった。しかし、対照群を設けて評価尺度を用いて検証している文献が少なく、研究者によって使用している尺度や、効果が示されている尺度が異なっており、長期的にその効果を検証している文献や、生きがいの尺度を用いている文献が見当たらなかった。

さらに、介護負担感については介護負担感の軽減につながると述べられているものの、評価尺度を使用して検証している先行研究は見当たらなかった。

2. 研究の目的

特別養護老人ホームで回想法の介入を試み、先行研究において明確に示されていない回想法の介入効果を明確に示すことである。

まず、1点目に、入所者への介入効果を数種類の評価尺度を使用して長期的に検証することである。2点目は、回想法の回想法の介入効果として生きがいの関係を明確に示すことである。3点目に、作成した行動観察スケールを使用し、実践中の参加者の行動・言動の変化を得点化して示すことである。4点目に、ベンダー観察記録表の得点の変化から参加者の変化を示すことである。そして、5点目に介護職員が回想法に介入することで、介護職員の負担感が軽減するか確認することである。

これらの結果から、回想法を活用した支援が、高齢者の生きる力を引き出す支援として適応でき、介護職員の介護負担感を減らすことに繋がる介入手法であるかを検討し、整理することである。

3. 研究の方法

(1)調査対象

①回想法スクール参加者

特別養護老人ホームに入所している高齢者13名。対象者は、男性が2名で女11名。平均年齢は86歳で、最低年齢が67歳、最高年齢100歳であった。対象者の選択は、特別養護老人ホームの介護職員に依頼し、了解が得られた者である。

13名を介護職員に依頼し、3つのグループ(A組・B組・C組)に分けた。A組は、女性4名と男性1名で平均年齢は87.4±7.9歳、B組は女性3名と男性1名で平均年齢87.8±9.3歳、C組は女性4名で平均年齢82.8±9.7歳であった。

介入前の、N式老年者用精神状態尺度(NMスケール)の得点は、23点(中等度認知症)～50点(正常)で、N式老年者用日常生活動作能力評価尺度(N-ADL)では、日常生活動作においてほぼ全介助(4点)～ほぼ自立(43点)となっていた。

②介護職員

回想法を実践する、特別養護老人ホームで勤務している全ての介護職員。棟別でみると、平成19年は、回想法介入した棟(混合棟)9名、認知症の棟11名、重度の棟12名の合計32名で、平成20年は、回想法介入した棟(混合棟)11名、認知症の棟13名、重度の棟11名の合計35名。

(2)回想法の介入と参加者への調査時期

A組・B組・C組の3グループに2ヶ月ごとに評価尺度を用いた調査を5回実施し、それぞれのグループにグループ回想法の介入を試みた。A組は、1回目の調査(ベースライン)

終了後に、回想法の介入を5週間実践し、介入終了直後(2回目)と終了から2ヶ月後(3回目)、4ヶ月後(4回目)、6ヶ月後(5回目)に調査を行った。B組は、1回目と2回目の調査(ベースライン)終了後に、回想法の介入を5週間実践し、介入終了直後(3回目)と終了から2ヶ月後(4回目)、4ヶ月後(5回目)に調査を行った。C組は、1回目・2回目と3回目の調査(ベースライン)終了後に、回想法の介入を5週間実践し、介入終了直後(4回目)と終了から2ヶ月後(5回目)に調査を行った。

(3)介護職員への調査時期

平成19年7月に1回目の調査を実施し、その後、平成20年2月から7月にかけて、3か所ある棟の中の1か所で回想法スクールを15回にわたって実践し、可能な限り介護職員にも参加してもらい、回想法スクール終了直後の、平成20年7月に2回目の調査を実施した。

(4)回想法介入期間

週に1回(祭日を除いた)、60分間。合計5回。

A組:平成20年2月26日～3月25日の期間の5週間

B組:平成20年4月15日～5月27日の期間の5週間

C組:平成20年6月17日～7月15日の期間の5週間

(5)回想法各回のセッション・テーマ

各回のテーマと、グループ毎の介入の特徴を表1に整理した。

表1 各回の回想法のテーマ

回数	テーマ		
	A組 特徴:言語的交 流中心	B組 特徴:歌・遊びの 動作を活用	C組 特徴:懐かしい動 作・味を活用
1回目	故郷の思い出	故郷の思い出	故郷の思い出
2回目	遊びの思い出	小学唱歌の思い出	盆踊りの思い出 わたがし作り
3回目	小学校の思い出	遊びの思い出	遊びの思い出 心太突き
4回目	初恋の思い出	青春時代の思い出	かき氷の思い出 かき氷作り
5回目	思い出アルバム 作成・修了証	思い出アルバム 作成・修了証	思い出アルバム 作成・修了証

クロズド・グループで実施し、各回テーマに合わせた刺激材料として、懐かしい音楽を開始前に流し、テーマに合わせた懐かしい品物に自由に触れてもらいながらセッションを行った。

セッション中の約束として、スクール開始前に、昔の懐かしい話をみなさんとたくさん話し、楽しい時間を過ごしていきたいことや、話したくないことは話さなくてもいいこと、スクール参加中の話はここだけの話とし、他で話さないことように、セッションのリーダーである研究者から説明した。

(6) セッティング

場所は、特別養護老人ホーム内の談話室を使用し扉を閉めて行った。スタッフとして、リーダー1名、コリーダー1~2名(介護職員)、逐語録記録者2名、行動観察スケール記入者2名、カメラ係1名、準備と片づけ1名を配置した。

(7) 評価尺度

① 回想法スクール参加者

参加者への直接質問による評価として、信頼性・妥当性が確認されている、近藤(2007)が開発した生きがい感スケール(K-I式)、McNair(1992)により米国で開発され、横山(2006)が示している気分・感情を測定するProfile of Mood States(POMS)短縮版、高齢者のうつ病のアセスメントとして代表的な、イエサベージが1983年に開発した高齢者抑うつ尺度(Geriatric Depression Scale: GDS)で、遠藤(2004)が示している短縮版のGDS15を用いた。

生きがい感スケール(K-I式)は、16項目の質問に対して、はい(2点)、どちらでもない(1点)、いいえ(0点)の3件法を用いて配点し、合計得点(最大32点)を生きがい感得点として算出した。質問の中に4項目の逆転項目が含まれていた。

さらに、評価者による誤差を避けるため同一の介護主任による観察評価として、日常生活における行動観察尺度である、鳥羽(2004)によって示されている意欲の評価、老年者、認知症患者の日常生活における日常生活動作能力を総合的に捉えることが可能な尺度で、小林・播口・西村(1988)によって作成されたN式老年者用日常生活動作能力評価尺度(N-ADL)、老年者、認知症患者の日常生活における実際的な精神機能を種々の角度から捉える行動観察による評価尺度で、小林・播口・西村(1988)によって作成されたN式老年者用精神状態尺度(NMスケール)を用いた。

そして、毎回の回想法スクールにおいて、回想法実践中の行動・言動を得点化して示すために作成した行動観察スケールを使用し、

2名による評価者〔トレーニングを実施し、観察者間一致率を算出した。算出式は、(一致した観察単位/全観察単位)×100で算出し、一致率は95.5%〕で、5分ごとの時間枠における参加者の行動・言動を得点で算出した。作成した行動観察スケール評価の指標を表2に示した。

回想法スクール実践直後にはスタッフ全員で、参加者の様子を総合的に評価するベンダー観察記録表を用い、項目ごとに合計得点を算出した。実践中の様子を毎回ビデオカメラで記録し、参加者の発言内容を逐語録として整理した。

② 介護職員

C. マスラックのバーンアウト測定尺度(MBI: Maslak's Burnout Inventory)を、久保・田尾が日本語に標準化した質問紙を使用し、バーンアウトの17項目の頻度について、「ない」から「いつもある」まで5段階にわたって、直接自己記入式で回答を得、バーンアウト3因子それぞれの得点を算出した。

表2 行動観察スケール評価の指標

得点	状態
+5	例外的に良い状態。 これよりも良い状態は存在しない活発な言語的、非言語的な交流がみられる。 例: 積極的な関わり、自己表現、社交性が特に高いレベルである。大声で笑っている。回想内容が自ら豊かに展開している。ジェスチャウアを活用して表現力豊かに発言している。
+3	良い状態を示す徴候が相当に存在。 言語的、非言語的な周囲の人との交流が快適に持続している。 例: 積極的な関わりや社交性があり、周囲に対して自分から関わりを持っている。会話が友好的に進行している。自発的に発言し、笑顔が多くみられている。周りの人との交流により回想内容が展開している。
+1	他者との交流がある。 言語的、非言語的な周囲の人との交流が少しみられる。 例: 事実のみを伝えたり、挨拶をしたり、簡単なジェスチャウアで肯定的な意志を伝えている。現在の状況に適応している。回想内容が展開しない。
-1	軽度の良くない状態が観察される。 言語的、非言語的な周囲の人との交流において、やや良くない状態が認められる。 例: 会話中に落ち着かなくなったり、退屈そうにしている。急がされて不快感を示す。要求不満が認められる。促されて発言するが、笑顔はみられない。
-3	かなり良くない状態。 言語的、非言語的な周囲の人との交流において、相当良くない状態が認められる。 例: 悲観的な口調で話しても共感が得られない。15分以上にわたって無視されている。会話中、言っていることを認めてもらえず無視されて不快感を示す。悲嘆、恐怖/持続性の怒り、状態が悪化して無関心および引きこもりに至る。
-5	無関心、引きこもり、怒り、悲嘆/絶望感などが最も悪化した状態に至る。 言語的、非言語的な周囲の人との交流において、とりわけ良くない状態が認められる。 例: 参加者が避難されたり、自尊心が傷つけられたり、責められるような状況で会話が続き、極度の悪影響が明らかである。30時間以上にわたって無視されている。

(8) 倫理的配慮

① 回想法スクール参加者

研究目的・方法・予想される損害と効果、個人情報流出する恐れがないことなどについて、個人情報保護法、臨床研究に関する倫理指針(厚生労働省)を遵守し、知り得た貴施設の個人情報を貴施設の許可なく発表、公開、漏洩、利用しない旨について誓約書を記入し、特別養護老人ホームの責任者の同意書による承諾を得た。対象者には、介入目的と個人情報流出の恐れがないことなどを、高齢者にわかりやすい言葉で説明し同意書による承諾を得た。家族の方には、介護職員か

ら説明して貰い同意を得た。

②介護職員

研究の目的や方法について施設責任者に文章で説明し、個人情報の流出の恐れがないことや、個人に危害が及ばないことなどについて誓約書を記入し、施設責任者の同意書を得た。さらに、全ての介護職員に、文書で同様のことを説明し同意書を得た。

(9)分析方法

①回想法スクール参加者

使用した評価尺度の得点について、SPSS17.0を使用し、3(グループ;A組, B組, C組) × 5(時期; 1回目, 2回目, 3回目, 4回目, 5回目)の分散分析を行った。

行動観察スケールの結果を経時的に表に整理し、合計得点を算出した。ベンダー観察記録表の項目ごとの回想法スクール1回目と4回目(5回目は思い出のアルバム作成のため人生回顧を促すのが目的ではないため)の合計得点について SPSS15.0 を使用し t 検定を行った。

②介護職員

SPSS15.0 を使用し、記述統計処理を行い、回想法を用いて介入した棟と介入しなかった棟の1回目と2回目のバーンアウト得点の変化をグラフ化した。

4. 研究成果

使用した評価尺度の中で、成果が示された結果について述べていく。

(1)回想法スクール参加者の調査結果

①生きがい感スケール(K-I式)の得点

図1は、グループ毎の生きがい感スケール(K-I式)の平均得点を示したものである。3(グループ; A組, B組, C組) × 5(時期; 1回目, 2回目, 3回目, 4回目, 5回目)の分散分析を行った結果、交互作用に $F=2.08$ 、 $p=0.06$ で有意な傾向が認められた。

多重比較を行ったところ、Aグループでは、1回目と2回目の間 ($p=0.03$)、Bグループは2回目と3回目の間 ($p=0.03$)、Cグループでは3回目と4回目の間 ($p=0.04$) に有意差があった。有意な差が見られた時点は、それぞれ介入の直後であった。

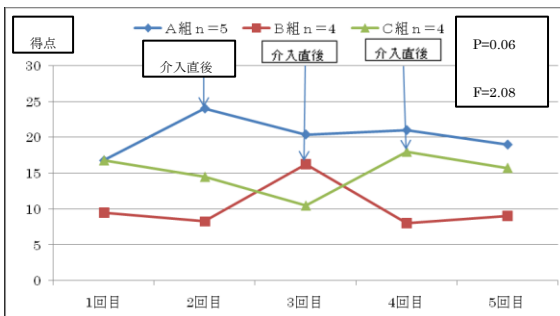


図1 3グループの生きがい感得点の変化

②ベンダー観察記録表

A組のベンダー観察記録表の項目ごとの1回目と4回目の平均得点の比較を図2に示した。全ての項目において、得点の上昇が確認できたが、有意な差は確認できなかった。

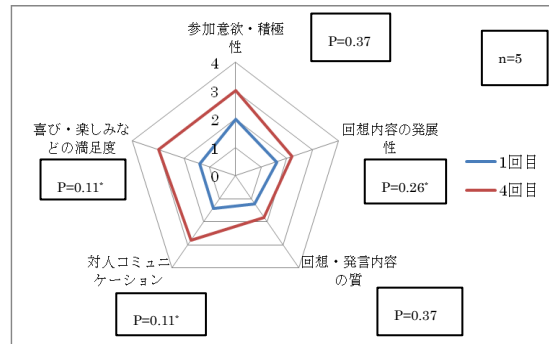


図2 A組ベンダー観察記録表項目ごとの1回目と4回目の平均の比較

B組のベンダー観察記録表の項目ごとの1回目と4回目の平均得点の比較を図3に示した。全ての項目において、得点の上昇が確認でき、「参加意欲・積極性」($P=0.02$)、「喜び・楽しみなどの満足度」($P=0.02$)、「回想・発言内容の質」($P=0.02$)の3項目において有意な差が確認できた。

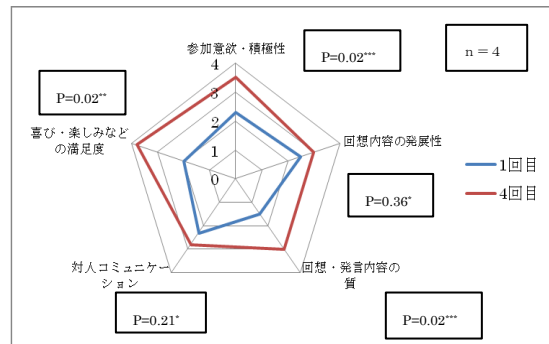


図3 B組ベンダー観察記録表項目ごとの1回目と4回目の平均の比較

C組のベンダー観察記録表の項目ごとの1回目と4回目の平均得点の比較を図4に示した。

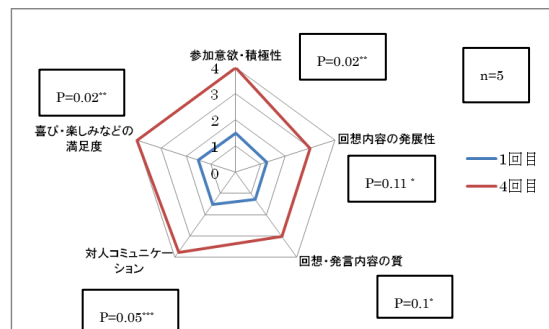


図4 C組ベンダー観察記録表項目ごとの1回目と4回目の平均の比較

全ての項目において、4 回目の方が、得点の上昇が確認でき、「参加意欲・積極性」(P=0.02)、「喜び・楽しみなどの満足度」(P=0.02)、「対人(集団)コミュニケーション」(P=0.05)の3項目において有意な差が確認できた。

③行動観察スケール

回想法実践中の評価として用いた行動観察スケールの結果について、13 事例中、C 組の1 事例(認知症で言語的コミュニケーションが困難)について表 3 に示した。

J さんは、1 回目 25 分遅れて参加。入室時、不安そうな表情で、質問に対して険しい表情で否定的な単語レベルでの発言が多く、行動観察スケールの 5 分ごとの時間枠の評価では常にマイナスの得点で、他者との交流も図れず合計得点もマイナス 13 点であった。2 回目以降は、懐かしい動作を取り入れ、拒否的な発言も減り、笑顔で懐かしい子供時代の話を中心に語る場面が増え、他者へのねぎらいの発言も聞かれるなど、5 分ごとの時間枠の評価でも、プラスの評価が増えていた。

表 3 J さんの行動観察スケールの結果

J さん 5 分ごとの行動観察尺度									
回数	テーマ		時間					合計	
			14:00~14:05	14:05~14:10	14:10~14:15	14:15~14:20	14:20~14:25		
1	自己紹介・ふるさとの思い出	得点							
		自発							
		促し							
2	夜店の思い出	得点	+1	+1	+1	-1	-1		
		自発	1	1	1	1	1		
		促し	1	1	2	1			
3	子供の頃の遊びの思い出	得点	+1	+1	+1	+3	+3		
		自発	1		1	1	1		
		促し	2	1	1	1	1		
4	かき氷の思い出	得点	+1	+3	+3	+3	+1		
		自発	1	2	1	1			
		促し	2	2	2	1	1		
5	思い出のアルバム作り	得点				-1	-1		
		自発				1	1		
		促し				1	2	1	
回数	時間							合計	
	14:25~14:30	14:30~14:35	14:35~14:40	14:40~14:45	14:45~14:50	14:50~14:55	14:55~15:00		
1	-1	-1	-1	-3	-3	-3	-1	-13	
	2		2	1	1	1	7		
	4	2	2	1	1	1	11		
2	+1	+1	-1	-1	-1	+1	+1	+2	
	1	2	2	1	1	1	7		
	1	2	2	1	1	1	14		
3	+3	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+18	
	2	1	1					8	
	1	2	1	1	2	1	1	15	
4	+1	+1	+3	+1	+1	+3	+3	+24	
	1	1	2	1	2	1	2	12	
	1		2	1	1	1	1	14	
5	+1	-1	-1	+1	+1	+1	+1	0	
	2				1	1	1	6	
	1	1	2	3	1	2	2	15	

(2)介護職員の調査結果

2 年間の回想法を用いて介入した棟と介入しなかった棟(認知症・重度)ごとの、情緒的消耗感得点、脱人格化得点、個人的達成感得点の平均得点の結果を図 5 に整理した。

回想法を用いて介入した棟では、情緒的消耗感得点の平均得点が、平成 19 年に 18.6 点で、平成 20 年に 18.2 点となり、脱人格化得点では、平成 19 年に 13.3 点であったのが、平成 20 年に 11.4 点となり、個人的達成感得点は、平成 19 年に 13.9 点で、平成 20 年に 14.5 点となっていた。

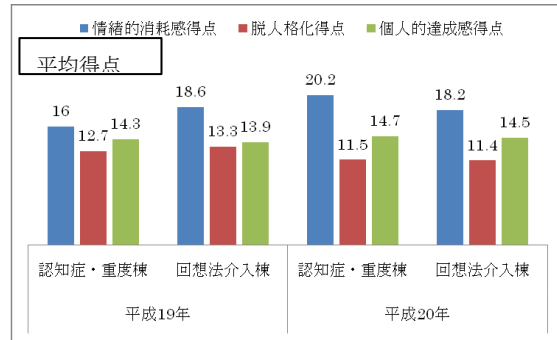


図 5 棟ごとのバーンアウト平均得点の変化

(3)研究の主な成果

10 ヶ月間の中で各グループに回想法の介入時期を 2 ヶ月ずつずらして、数種類の評価尺度を用いて調査を行った結果から、感情・気分を測定する POMS 短縮版と、抑うつ状態を評価する GDS15 では、効果が示された者と示されなかった者がいた。日常生活における評価として、意欲の評価、N-ADL、NM スケールでは、介入直後に機能が一時的に改善した者と変化がみられなかった者がいた。一方、生きがい感スケール(K-I 式)では、回想法介入直後に改善が確認できた。

これらの評価尺度の結果から、回想法の介入より、生きがい感は上昇し、日常生活における行動面でも一時的に改善することが確認できた。

このことから、回想法スクールに参加することで、特別養護老人ホーム入所者の生きがい感は上昇し、それに伴って、日々の生活における行動や認知機能も腑活化する可能性があることが示された。しかし、これらの効果は、長期的に継続されず、一時的な効果であることも示された。

また、回想法実践に伴う評価尺度として生きがい感スケール(K-I 式)を活用することは有効であることも確認できた。

一方、行動観察スケールを作成・使用したことで、回想法スクール参加中の参加者の行動・言動の変化を経時的・客観的に示すことが可能になった。このことから、実践中の評価が容易になったといえる。

さらに、ベンダー観察記録表の結果から、「参加意欲・積極性」、「喜び・楽しみなどの満足度」、「対人(集団)コミュニケーション」、「回想・発言内容の質」に有意な改善が確認でき、回想法スクール参加による変化を示すことができた。

そして、介護職員が回想法スクールに参加バーンアウト尺度の結果から、回想法スクールに参加した棟の介護職員の情緒的消耗感得点と脱人格化得点は若干ではあるが軽減し、個人的達成感得点の上昇が確認できた。回想法スクールに介護職員が参加するこ

とは、利用者の情報量が増大し、利用者理解につながる。また、回想法における利用者の思いを引き出し、受容するコミュニケーション技法が身についていく。これらのことから、介護職員が回想法スクールに参加することによって、介護負担感が若干ではあるが軽減したといえる。

(4)得られた成果の位置づけ

回想法は、保健・医療・福祉など多岐にわたる分野で活用されている。しかし、先行研究では、実践に伴う有効な評価尺度が不明確で、生きがい感との関係が示されておらず、回想法実践中の客観的な評価尺度がなく、介護職員の介護負担感の変化が明確に示されていなかった。

そのため、本研究では、これらの課題を解決し、回想法を活用した支援が、高齢者の生きる力を引き出す支援として適応でき、介護職員の介護負担感を減らすことに繋がる介入手法であるかを検討することを目的としていた。

その結果、本研究における成果として、回想法の介入効果が確認できる評価尺度が明確になり、生きがい感との関係も明らかになった。そして、回想法スクールによる介入効果は、一時的であることも明確に示せた。また、行動観察スケールの作成・使用により、回想法実践中の客観的な評価が可能になり、回想法に参加した介護職員の介護負担感の変化を明確に示せたことである。

そして、回想法は、高齢者の生きがいに繋がる支援として位置づけることが可能で、介護職員の介護負担感の軽減に役立つ可能性があることが確認できたことである。

このことにより、高齢者の入所施設や病院、在宅で介護が必要な高齢者と家族にも回想法を用いることで双方にとって、効果が期待できる可能性が示せたといえる。

社会的な課題として、高齢者や、認知症を患った高齢者が増え続けている。さらに、介護者の介護負担感も大きな課題となっている。その中で、双方にとって効果が期待できる支援の1手法として回想法の介入効果が示せたことは、社会的にも大きな意義があったといえる。

また、わが国では、多岐にわたる分野で回想法は活用されている中で、回想法介入による効果が明確に示せたことや、回想法実践中の客観的な評価尺度が示せたことは、今後の実践に応用が可能で、実践的研究を積み重ねていく上で重要な意義があったといえる。

(5)今後の展望

回想法スクールの参加により得られる効果は、一時的であることが明確になったことから、回想法スクール参加中に引き出した懐

かしい記憶から、個別性を尊重した、1人ひとりの高齢者に合った支援を展開していくことが必要といえる。

また、介護職員は、日々の日常生活において、回想法の技法を活用したコミュニケーションを、継続して図っていくことが必要といえる。その過程において、生きがい感に変化があるのか、長期的に検証していくことが必要といえる。

一方、特別養護老人ホームなどの高齢者入所施設などでは、日常的に入所者の懐かしい昔の記憶に働きかけていくことで、個別性を尊重したケアが実現していく可能性があることから、回想法について啓蒙活動を行っていきたい。

さらに、今回の調査は、特別養護老人ホームでの実践を通して得られた成果であり、今後は、在宅で生活を営んでいる高齢者を対象として、回想法の介入効果を検証していきたい。また、懐かしい記憶は誰にでも存在することから、高齢者だけでなく障害のある人など、対象を拡大して、回想法の介入効果を検証していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①津田理恵子：高齢者福祉施設における回想法の実践－対象群を設けた介入効果と生きがい－，神戸女子大学健康福祉学部紀要，査読有，1,43-56,2009.

②津田理恵子：特別養護老人ホームにおける回想法の実践－クローズド・グループによる介入効果－，日本看護福祉学会誌，査読有，14(2)，109-123,2009.

[学会発表] (計 2 件)

①津田理恵子：グループ回想法の介入効果-多層ベースラインでの生きがい感-，第22回日本看護福祉学会，2009/6，滋賀.

②津田理恵子：特別養護老人ホームにおける回想法介入の効果 - 対象群を設けた2回の調査結果の比較 - ，第11回日本老年行動科学会，2008/9，京都.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津田 理恵子 (TSUDA RIEKO)

神戸女子大学・健康福祉学部・准教授

研究者番号：80441202